

水源池の思い出

渡辺 雅司

夏至が近づくにつれて札幌の朝はみるみる早くなる。窓の外が紫色になったかと思うと、景色の輪郭が浮き出てくるまでそれほど時間がかからない。当時は夜型の生活をしていたので、仕事疲れを解消するために、コーヒーを一杯のみほすと早々に外に出る。

朝四時。西岡の朝の外気は冷たく、ジーンズのコートを羽織っていく。まだ未舗装だった西岡の尾根道はそれこそ三六〇度の眺望を見せてくれていた。左手には広大な農林試験場とそれに続く白樺の原生林。焼山と白旗山がラクダのこぶのような姿を見せている。右手には藻岩山。まるで刈り込まれた髪のように、幾本ものスキーコースが曲線を描く。まばらに立つ住宅の庭ではライラックのこれまた薄紫色の花が、可憐な姿で咲き誇る。

雲一つない空は、遮るものもなくどこまでも高く、吸い込まれそうだ。とそのとき、はるか上空で奇妙な音が聞こえるではないか。ギュギユ、ギュギユ、ギュギユ。それは音ではなく声だった。しかしかなりどぎつい声なので、そう

小さな鳥ではないと思うのだが、一向に姿は見えない。それも数羽のはずだ。しかしその声は、徐々に間隔を縮め、ギュギユギユギユとなる。と、羽根をたたんだカモほどの鳥が、猛スピードで急降下してくるではないか。その黒い塊はもう少して地面に激突と思った瞬間、突如羽根を開き、パラシュートのように浮き上がる。そのときの空気をつかむ羽根の音の迫力は今も耳に残っている。バサバサバサという音があたりの静寂を裂き破る。東京から来たばかりの僕は、初めて耳にする野生の響きに釘付けになった。それも一羽や二羽ではない。次から次に海に飛び込む海燕のように、突っ込んでくる。

後日、NHKで立山の雷鳥を撮っていた妻の弟が来札したとき、彼にこの不思議な鳥の驚異的なスピード降下と大地を揺さぶるかの豪快な羽根音を見せた。するとさすがは鳥の専門家、即座にこの鳥の名前を言うではないか。オオチシギ。そう言いながら彼も驚いていた。というのも、彼はこの鳥のことを聞きつけて、オホーツク海岸で何日か撮影したその帰りだったの

だ。まさかその奇鳥が、札幌のはずれの西岡にいるとは思わなかったのだろう、正直驚き、感動していた。

道内出身の学生たちにとっては日常だったのだろうが、当時樋口荘に住んでいたやはり都会出身の（いや失礼！札幌だって大都会だった）山内君だった。彼もその正体がわからず、二人で声を聞かされたに、彼は大きな目をまん丸くして、色白の顔に唇を尖らせて、好奇心を丸出しにするのだった。これが彼との最初の出会いであり、僕は彼の純粹な心にその場で打たれたのだった。思いがけぬ不慮の事故で、寝たきりになってしまった彼を病院に見舞ったとき、あの鳥をおぼえているか？との問いかけに、彼は目でうなづいてくれた。そのときオオチシギという名を彼に告げたのだった。

あれは新雪が降り積もった一月のことだ。夜中の十一時半だというのに、玄関のドアを乱暴にノックする音がした。開けるとそこには酔眼朦朧とした粕谷君と山内君がいるではないか。「先生、飲みましよ！」という彼らの足元には

雪まみれのサッポロ・ジャイアンツのどでかい
壇が転がっているではないか！ 聞くとバス
もないので澄川駅から、ラグビーボールのよう
に壇を蹴ってきたのだという。吹雪がおさまっ
た後の夜景は雪明りでとても幻想的だった。

そのときぼくはとつさに閃いた。まず浮かん
だのは、新雪の水源池に行きたいという思いだ
った。さつきまでストーブの中で吠えていた吹
雪、そこで現れた思いがけない来客、これをた
だの飲み会にはいけないという声が聞こ
えたのだ。水源池が呼んでいたのだ。「よし、
これから水源池に行くぞ！」といって、愛車サ
ニ一のライトバンの雪を下ろし、三人で水源池
目指して走り出した。空は満天の星だった。例
の尾根道を走っているとき、僕は思わず言った。
「樋口荘の奴らを起こすぞ！」

突然の教師の闖入だったが、何人かの学生た
ちが乗ってきた。まずは石黒君だ。強い近視の
彼は、黒縁の眼鏡をかけなおし、山内君に続い
た。きまじめな飯島君はレポートがあるからと
断った。それでも総勢六、七人、無理に車に押
し込め、水源池に乗りつけた。まだ公園として
整備される前のこと、入口の農家の廃屋とそこ

から延びる曲がりくねった小道。新雪をかぶっ
て道を惑わせるが、星空と雪明りのおかげで、
ヒマラヤスギの巨木が並ぶ湖畔にたどりつけ
た。対岸には雪をかぶった白樺がその白銀の幹
を幾本も光らせている。

当時はまだ紙コップなどない時代、二リット
ルはあるジャイアンツの蓋を歯で開けると、ビ
ールが噴き出してきた。それをみんなで回し飲
みするのだから豪快だ。湖面に降りる十段ほど
の古い石段にみな腰掛けていたので、雪で滑っ
た学生が、斜面を転がり落ちる。それがあまり
に滑稽なので、みなビールを一飲みしては、新
雪の中に飛び込み、転がり落ちる。その様子は
今も目の前に現前とする。言葉はいらなかった。
大の大人なのだが、さながらじゃれあう仔犬の
ようで、僕は目を細めて見ていた。子供のころ、
わが家の庭で、小学校の同級生らとはしゃぎま
わった時のことをなぜか思い出していた。そし
てその光景を広い廊下の寝椅子の上で、目を細
めて眺めていた祖母のことを。

あれは札大に赴任して一年目が終わろうと
するとき、粕谷君は卒業を控えていた。まさか
大学に勤めて、こんな純真な学生たちに会える

とは思ひもしなかった。これもみな新雪に覆わ
れ、静かに眠っていた水源池というトポスがわ
れわれの心を解き放ってくれたのだろう。

それ以来、水源池は僕の散歩道であり、生き
た書齋となった。湖岸中腹に据えられた石のテ
ーブルに向かい、ロシア語の本を、一時間に二
十ページ速読する訓練をしたものである。湖岸
の奥には小さい悪魔を思わせるとがった無数
の菱の実がばらまかれており、さらに奥の浅瀬
には一メートルを超すような巨大な鯉が幾匹
も遊んでいた。水芭蕉が咲き誇り、さながら尾
瀬を思わせるようだ。エゾハルゼミの合唱の中、
時折郭公が高い声で鳴きかわす。

そして僕は、その数年前に黒澤明監督の通訳
をしたことのある「デルス・ウザーラ」の舞台
となった極東地方ウスリーの森や、そこで暮ら
す猟師デルスーのことを思い出していた。

(了)